

## 14. ウェスト教師についての資料若干

機械系三学科図書室 滝沢正順

### 1. はじめに

図書館におけるレファレンス業務では、さまざまな質問や問い合わせにたいして回答がおこなわれる。クイックレファレンスとして即答できる場合も多いが、いろいろなツールを使ったり、照会をおこなう等、調査に時間と手間の必要なケースも当然多い。

大学図書館で受ける問い合わせパターンのひとつとして、その大学の教員や出身者に関するものがある。現職教員や研究員の執筆論文の所蔵調査、物故した教員・卒業生に関する文献や事項調査、等々である。

問い合わせの多い事例や、現在・将来にわたって問い合わせの予想されるケースについては、図書館として資料を収集・整理しておくことになる。しかし物故者のばあい、亡くなってから年数がたっていたり、業績等をまとめた図書や書誌・研究論文等がない人物では、資料の収集・整理が困難なこともありうる。

ここではそうした年数のたった物故者のひとりとして、明治時代、工部大学校と(東京)帝国大学のお雇い外国人教師であったウェスト(Charles Dickinson West 1847 - 1908)に関して、いくつかの文献に散見する若干の事項を述べてみたい。これらの事項は断片的なものであるが、伝記的資料等のとぼしいウェストに関しては貴重な断片である。これらの多くはウェストについて筆者が以前にまとめ、紹介したさいにはふれていない。<sup>(注1)</sup>

なお、本稿に名前の出てくる方については、歴史的人物として敬称・官職等を省かせていただきますので、ご了解をお願い申し上げます。

### 2. 『大日本』

ウェストは明治15年(1882)にイギリスから来日し、工部大学校と(東京)帝国大学の教授・教師として機械工学と造船学を教えた人物である。来日後は、明治31年(1898)に一度だけ一時帰国したことがあるが、それ以外はずっと滞日し、明治41年(1908)に在職のまま日本で亡くなった。妻子をもたなかったので子孫はいないが、東京の青山霊園外人墓地にある墓は現在は日本機械学会が管理しているとのことである。<sup>(注2)</sup>

ウェストは日本で professor であった。明治19年発足の帝国大学の直接の前身である2つの大学(工部大学校と東京大学)では、日本人でも外国人でも professor の日本語の呼称は「教授」であった。しかし明治19年に帝国大学が発足したさい、日本人は教授であるが、外国人 professor の呼称は「教師」となった。この点は明治30年に帝国大学が東京帝国大学と改称されてからも変わりはない。したがってウェストについても、明治19年以前の約4

年間はウェスト教授、帝国大学になってから亡くなるまでの約 22 年間はウェスト教師である。ウェストの前任者のヘンリー・ダイアーや同僚だったジョサイア・コンドルは、後に東京帝国大学名誉教師の称号を贈られているが、ここでも外国人であるので名誉教授でなく名誉教師である。(ウェストは在職のまま亡くなったため、名誉教師の称号は受けていない)。

ウェストは、工部大学校で機械工学と土木工学を教えていたヘンリー・ダイアー（工部大学校の都検(教頭)）の機械工学の後任として来日した。ヘンリー・ダイアーはウェスト来日前にイギリス(スコットランド)に帰国したので、日本で会ったことはないが、帰国後に出版した著書のひとつ『Dai Nippon, the Britain of the East』のなかにウェストの名が 2 箇所出ている。同書は昨 1999 年に邦訳が出たので（平野勇夫訳『大日本』、実業之日本社）それによるが、1 箇所(37 頁)はダイアーが離日にあたり、学課の後任の推薦をロンドンの代理人に依頼してウェストが任命され、ウェストは現在も東京帝大の教師である、というもの。「現在」は、もちろん『Dai Nippon』出版の 1904 年(明治 37)当時のことである。

もう 1 箇所(231 頁)には、ウェストが先頃ダイアー宛に送ったという書簡の一部が引用されている。この引用文は今のところウェストの書簡として知ることのできる唯一のものである。この書簡のなかでウェストは、日本人には発明の才能がないという一部の人の意見をしりぞけ、日本人の設計した独創的な（機械類の）設計をいくつも知っていると言っている。

### 3. 卒業証書と『日本機械学会 60 年史』

東京大学機械系図書室には、明治 32 年 7 月に東京帝大機械工学科を卒業した渡辺断雄の卒業証書がある。(額縁に入れ閲覧室内に常時掲示)。ご子孫の方から東京大学に寄託されたものであるが、この卒業証書にはウェストの名がある。

卒業証書の全体を紹介しておくと、最初の行に卒業する渡辺断雄の名がある。2 行めから、「東京帝国大学工科大学機械工学科ヲ修メ定期ヲ歴テ試問ヲ完ウシ正ニ其業ヲ卒ヘタリ仍テ之ヲ證ス」とあって、その後、ウェスト(機械工学)、真野文二(機械工学)、井口在屋(機械工学・材料及構造強弱学・応用力学)、大久保忠敬(機械工学)、中野初子(電気工学)、E. バールセン(製造冶金学)、三輪桓一郎(数学)、武田三郎(火兵論)、山崎覚次郎(工芸経済学)の順に教官の担当科目と姓名と印がある。

さらに、「各教授ノ證明ヲ認了シ授クルニ卒業證書ヲ以テシ本科ノ学業ニ堪能ナルヲ證ス」。そして明治 32 年 7 月 10 日の日付けと東京教帝国大学工科大学長の辰野金吾の名があった後、「東京教帝国大学工科大学長辰野金吾ノ證明正當ナルヲ以テ東京帝国大学ノ印ヲ鈐シ予ノ名ヲ署ス」。そして東京帝国大学総長菊池大麓の名があって証書の文は終わる。

「各教授ノ證明ヲ」云々の前の 9 人の教官名の上にはそれぞれ官職・学位・勲位がある。卒業証書全体のなかで、この部分の各教官名のみ他の部分と筆跡がちがひ、また個々人の

筆跡もそれぞれ異なるので、ここは各教官の自署のようである。外国人二人には署名（片仮名でなくアルファベット）のあとの印はない。

この卒業証書にもあるように、ウェストは複数の教官のうちの一人であった。しかし外国人であることもあってか印象にはつよく残っている場合もあったようである。

昭和 33 年(1958)に出版された『日本機械学会 60 年史』（同会編・発行）のなかに、年輩の会員の回想をあつめた「思い出」と題する章があって、全部で 51 編の回想のうち 4 人の文にウェストの名が出ている。以下それを述べる。

明治 33 年東京帝大機械工学科卒業の鹿取龍造の回想「思い出」には、「明治三十二年頃の事です。が当時の先生は真野先生、井口先生、斯波先生(中途より)、大久保先生、外に英人ウェスト様等でした」とあり、上の卒業証書と同じ年のほぼ同じ教官名が記されている。

明治 39 年同帝大同学科卒の原田九郎の回想「私の警視庁時代」にはウェストに指導されたという記述がある。卒業の「翌年東京博覧会が開催され観覧車とウォーターシュートが建設されることになり私が其設計工作に従事する様になりましたが、全く未知のことでありましたので観覧車はウェスト先生の御指導でウォーターシュートは末広恭二博士と佐野利器博士の御助力で完成しました」。この博覧会では不忍池から上野の山にエスカレーターが観覧物として架設されたが、これが現在のデパート等のエスカレーターの始祖となったとも記されている。

明治 41 年同帝大同学科卒、つまりウェストの死(1 月 10 日)の年の 7 月に卒業した西山文雄の回想「想ひ出の記」には「真野先生の弔詞」と題する部分があって真野文二のことが書かれている。「ウェスト先生が死去された葬送の日教授として又本会々員としての弔詞を読まれたが其末節に「天日また曇るあゝ悲しい哉」とあった。丁度曇天であり、先生の奇知を想起して當時を忍(マ)ぶ次第である。」

このときの真野文二の弔詞は東京帝大総長浜尾新の弔詞とともに明治 41 年 1 月の『東洋学芸雑誌』（第 25 巻 316 号）に掲載されているが、「北風其れ涼く天日又陰る嗚呼哀哉」と回想とほぼ同じ語句が見いだせる。またこの西山文雄と同級であった朝倉希一は、このウェストの葬儀で学生代表として弔辞を読んだ。このときのことを朝倉は、昭和 51 年(1976)出版の著書『人生を考えよう』（開発社）のなかに記し、「参会の先生の中に涙を出された人もあられた」と述べている。

明治 41 年同帝大同学科卒、つまり西山文雄・朝倉希一と同級であった斉藤三三の回想「井口先生を憶ふ」は井口在屋についての文で、この中に斎藤宛の井口の書簡が 1 通影印つきで紹介され、書簡にはウェストの死去以来多忙であったと記されている。「ウェスト先生没せられて以来頗る多忙で閉口いたしました。が次学年からは学科受持等稍整備の筈、ちと安心できさうとぞんじます。」

書簡の末尾には「四十二、八、二。ゐのくち ありや。」とあるので、明治 42 年 8 月 2 日に書いたものであることがわかる。ウェストは亡くなったとき勲 2 等に叙せられたが、

東京大学事務部所蔵の御雇い外国人関係書類（マイクロフィルム版を東大総合図書館所蔵）のなかのこの叙勲のための上申文の原稿は井口の執筆のようで、末尾に、この書簡と同じ形式の「四十、十二、二十八。ゐのくち ありや。」という記載がみられる。

ウェスト死去以来約1年半の間の「頗る多忙」であった中には、井口自身の病気や母親の病気と死去という個人的なことも含まれている。しかしウェスト関係のことについても、死去と葬儀、『機械学会誌』第10巻18号(明治41年2月)掲載のウェストの伝記(追悼文)の執筆があるほか、確証は今は見いだせないが、工科大学構内にたてるウェスト銅像のための仕事(募金等)や、ダブリンほかイギリス(当時の)にいるウェストの遺族(弟妹)との連絡等もふくまれていたかもしれない。

#### 4. ウェスト胸像

現在も建設時と同じ東大工学部構内にたつウェストの銅像(胸像)は、位置としては工科大学本館(大正12年の関東大震災で大破し、昭和になって同じ場所に現在の工学部1号館が建設)の前庭に、本館正面玄関に向かって歩く人を右方向から見おろす向きで建てられた。つまり本館にたいして横向きになっているため、銅像を顔の正面から写真撮影すると背後には本館でない建物(現在なら工学部6号館)が写り、挿し図などの説明ではまぎらわしくなっている場合がある。なお、この銅像は、除幕式が明治43年3月19日。胸像と台座附属のパネルは沼田一雅の作。台座の設計と台座周辺の配置はジョサイア・コンドルによるものである。

銅像とは別に、この胸像の石膏像が東大内にある。従来は東京大学工学部2号館2階の機械系会議室内に、井口在屋や加茂正雄の銅像とともに置かれていたが、東京大学総合研究博物館で1998年に開催された展覧会「博士の肖像」に出展され、その後は同研究博物館の保管になっているそうである。これまで銅像の写真を掲載した文献は幾つかあるが、石膏像については同展覧会の図録によってはじめて写真が一般にみられるようになった。<sup>(注3)</sup>

#### 注

(1)『御雇外国人教師ウェスト資料集』滝沢正順編・発行、1998年3月。

滝沢正順「ウェストとウェスト文庫」、『図書館の窓』(東京大学附属図書館報)第38巻4号、1999年7月、48-50頁。

(2)鈴木一義「日本の機械工学教育、チャールズ・ディキンソン・ウェストを中心に」、東京大学編・発行『学問のアルケオロジー』、1997年、381-390頁。

高橋征生「機械工学教育者 C.D.ウェスト・日本機械学会との関わり」、新エネルギー・産業技術総合開発機構平成11年度調査報告書 NEDO-IT-9911-1『産業技術歴史・継承調査』(委託先・研究産業協会)、2000年3月、1-8頁。

(3)木下直之編『博士の肖像』、東京大学出版会、1998年、127頁。